

(日置郡東市来町湯田・市来町大里)

位置と環境

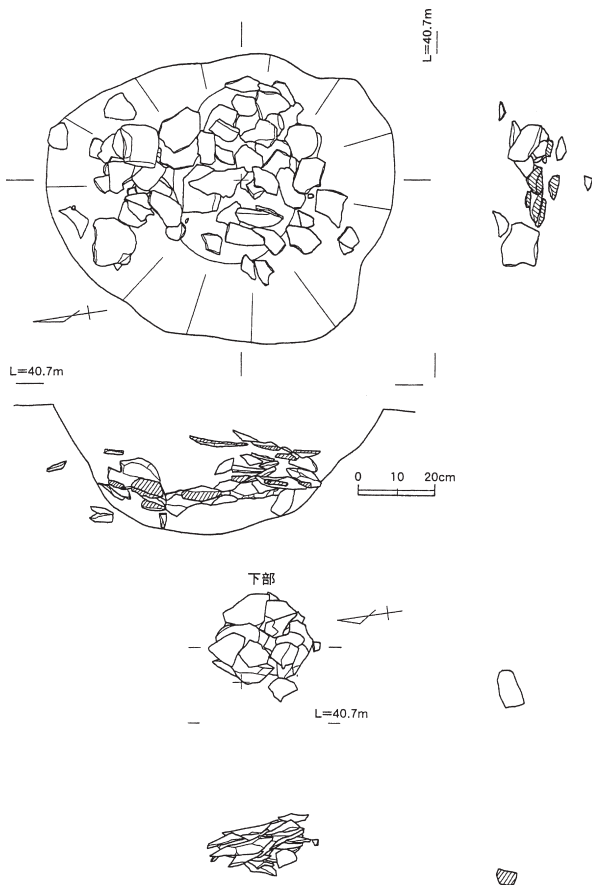
遺跡は、町の中心部から東に約400m、東シナ海からは直線距離で約1.5km内陸の標高約40~60mの台地上に立地している。

調査の経緯

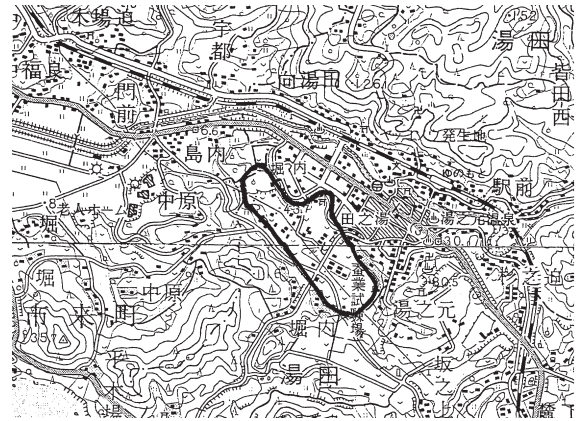
南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴い、県教育委員会が建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（機構改革により平成13年1月から国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所に改称）から委託を受けて、平成8年度（1996）から平成11年度（1999）にかけて発掘調査を実施した。

遺跡の範囲が広く、かつ長距離におよぶため、市来町側から東市来町側にかけて、調査区を第1地点から第5地点に区分して調査を実施した。

調査面積は62,000m²である。



第2図 安山岩集積遺構



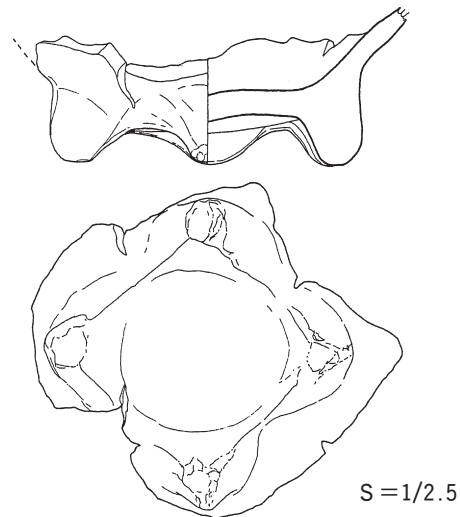
第1図 市ノ原遺跡の位置

遺構と遺物

調査の結果、旧石器時代、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期や弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世にわたる複合遺跡で、各時代の遺構や遺物が発見されている。

旧石器時代は、ナイフ形石器文化期の礫群が1基検出され、ナイフ形石器・台形石器などが出土している。また、旧石器時代細石刃文化期では、細石刃・細石刃核・敲石などの出土が認められ、該期の研究に貴重な資料を提供している。

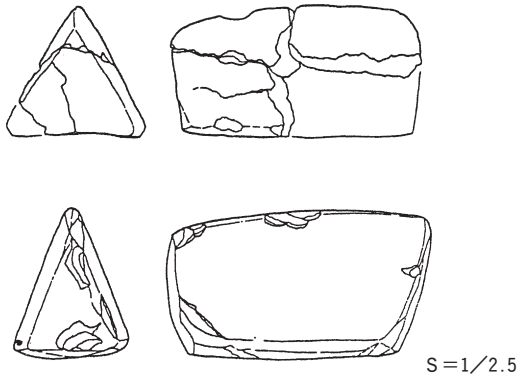
縄文時代は、早期のものを中心に集石遺構が70基以上検出されているほか、縄文中期のもと思われる安山岩製剥片の集積が1か所検出されている（第2図）。このほか、遺物では蛇紋岩製の塊状耳飾りや、九州では、熊本県や大分県を中心に10数か所の



第3図 竹崎式土器

出土が知られている竹崎式土器が出土しており、県内では稀少な発見となっている（第3図）。

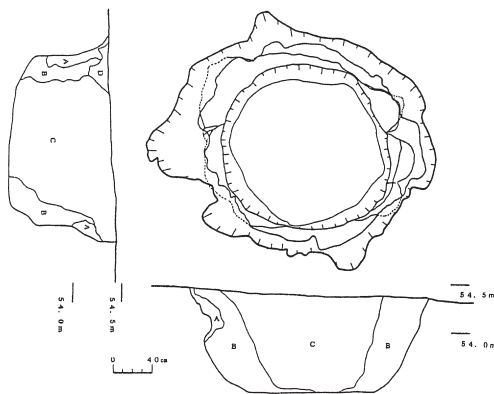
また、縄文時代中期後半～後期初頭に北陸から東



第4図 三角壩形土製品（上）・石製品（下）

北南部を中心に出土する三角壩形土製品・石製品に類似した資料が出土しており（第4図）、海を通じた交流などを考える上で貴重な資料である。

縄文時代晩期では、竪穴住居跡や貯蔵穴と思われ



第5図 土坑実測図

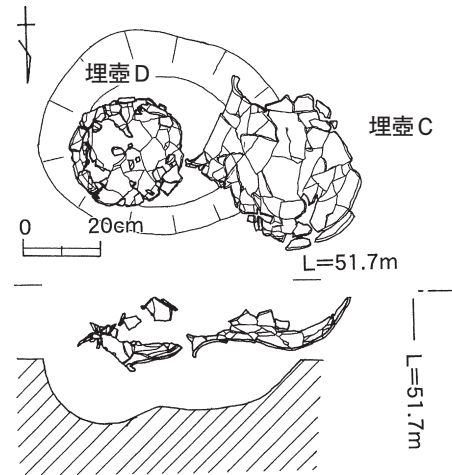
る土坑が検出されている（第5図）。このほか、異形勾玉や管玉、石刀などの遺物が出土している。なかでも異形勾玉は、新潟県糸魚川産の石材を利用しており、注目される発見である。

縄文時代晩期～弥生時代前期のいわゆる刻目突帯文期の本格的な調査は、金峰町高橋貝塚の発掘以来約40年ぶりのことで、如意状口縁をもつ甕などの一括資料が土坑内から良好な状態で出土している。今後、該期の研究の進展に寄与するものと思われる。

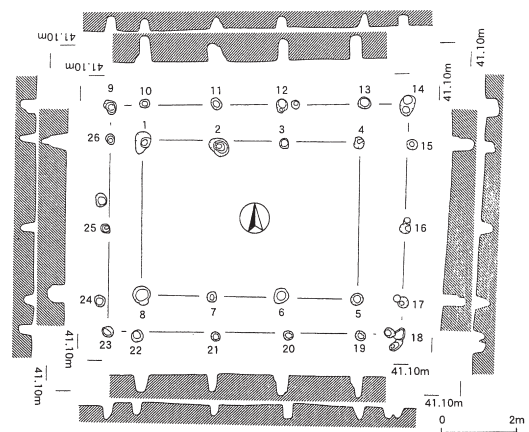
弥生時代では、前期の埋壺が4基（第6図）、前

期末～中期該当の竪穴住居跡が5軒検出されている。なかでも2号住居跡からは中九州系の土器とともに炭化したドングリが出土しており、薩摩半島西岸における土器の広がりや食文化の一端を考える貴重な資料である。

古墳時代は住居跡3軒のほか、貝殻類の入った土



第6図 埋壺実測図

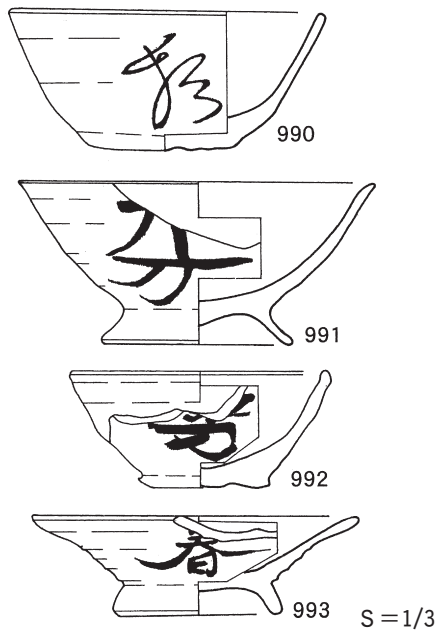


第7図 四面庇建物跡実測図

坑などが検出されている。

平安時代で特筆すべきは、第1地点で検出された15棟の掘立柱建物跡群である。四面庇建物跡や倉庫跡と思われる総柱建物跡が含まれることから役所跡や寺院跡など、特殊な建物跡群である可能性が高いと考えられる（第7図）。

この時期の遺物は、土師器・須恵器を中心に4万



第8図 墨書土器

点以上出土している。特に、「春」・「奉」・「松」・「厨」などの文字が描かれた墨書土器や刻書土器が計200点出土しており（第8図）、県内における古代史の

解明に糸口を与えるものとなるであろう。

近世は、安永7年（1777）以前に参勤交代でも利用された九州街道（出水筋）の一部と思われる道跡が検出され、注目を浴びた。両脇に排水溝を備えており、埋土からは、薩摩焼などが出土している。このほか、道跡の周辺からは、鍛冶炉や建物跡などの遺構も検出され、街道添いの生業を考える上で貴重な発見となっている。このほか、土壙墓が12基検出され、人骨とともに寛永通宝などが出土している。

特徴

弥生時代の集落跡である。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003「市ノ原遺跡（第1地点）」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』49

（三垣恵一）